

試煉に立つ文明

小田 丙午 郎

はし が き

「試煉に立つ文明」——これはトインビーの原著 *Civilization on trial* の深瀬基寛氏の原譯の題名をその儘筆者は表題に轉借したものである。筆者は本文に於てトインビーの所謂「文明」なるものの、本質に觸れその構造を探りそうして彼の歴史觀を捉えようと意圖するものである。トインビーの代表的著書として擧げられているものに *Study of History* (歴史の研究) がある。これは言はゞ史家トインビーの史學の組織的體系的記述である。これに對し表記の *Civilization on trial* は世紀人トインビーの史觀の啓蒙的告白的な敘述である。筆者の本文の所論の據つて立つ所は前者よりも寧ろ後者である事をここに一應お断しておく。

本 論

一 文 明

トインビーは前述の「歴史の研究」に於て文明即ち *Civilization* を文化即ち *Culture* と區別する。文化とは彼によれば政治と經濟との併立概念である。文明とは文化を中核として政治經濟を複合した一つの共同社會である。彼の言葉に従えば *Societies* である。更に詳しく言えば文明と呼ばれる社會である。これを歴史家の一般の表現によれば文明統一世界または文化圏に相當するであろう。

では彼は何故に一般の表現である文明統一世界若くは文化圏といふ語法に従はないで「文明」なる概念を選んだであろうか。思ふに文明統一世界若くは文化圏と呼ばれる時、人は地域的完結體を連想するであろう。彼の所謂文明は地域的完結體であるよりは寧ろその地域的完結體の基

體をなす文明そのものである。そうして彼はこれを固有名詞している（かゝる時彼は Civilization を大文字を以て書く）。斯る文明の單元は然らば幾許の數に還元されるか。彼は上代から近世に至るまでに斯る單元を埃及を始に西歐を終として二十一に分類する。そうして之等二十一の文明の大部分は死滅して現存しているものは西歐、東歐、回教、印度、極東の五つである。彼によれば英吉利の歴史は英國の歴史たるにとゞまらぬ。それは西歐の歴史である。西歐の歴史は西歐の歴史に局限されない。それは世界史へ連続する。斯る史家としての學的要請が彼をして彼の歴史の視野を擴大し、如上の「文明」の發見させたのである。彼は此の意味に於て國民史家ではない。また所謂ヨーロッパ一元論的世界史家でもない。彼の史學の研究の對象は民族ではない。ヨーロッパ文明ではない。また人類一體的世界でもない。

それは「文明と呼ばれる」社會の研究である。上に述べた如く世界は二十一の文明を産んだ。そうして現存するものは五つである。既存文明と現存文明とは然らば如何に關連するであろうか。彼によれば現存文明は既存文明とは縦に父子相續關係に立つている。此の好例を人はギリシヤローマと近代西歐文明との關係に擧げる事を許されるであろう。一方現存文明は相互に如何なる關連をもつか。彼は此等文明相互の關連を姉妹關係なる言葉を以て言い表している。例えば東歐と西歐とはギリシヤ正教とローマカトリック教といふ精神的紐帶を有つてはいないか。歴史は縦に文化の時代的發展的類型を規定する。トインビーは更に此に對し同時代の共存の文明の比較研究を取容れている。因に彼の歴史研究の方法は獨逸風の先驗的演繹法でなく、むしろ母國英吉利風の經驗的歸納法である。そうして此は彼自らによつて告白される所である。トインビーの所謂文明なるものの意味されるものと彼の史風的一端とは以上の説明によつて明になつた事と信ずる。吾人は更に進んで彼の所謂文明そのもの、實體を捉えねばならない。それに至るに先立ち吾人は世紀の人としてのトインビーの現代に對する要請に觸れる事を余儀なくされる。時代への要請を以てして歴史の認識——これ等は凡ての史家たるの、不可分離の條件ではないか。

二 西歐文明

ヨーロッパに於て西歐文明に對する自己批判の始められたのは十八世紀に於てであつた。それが危機の意識にまで深められたのは第一次世界大戦後の事である。人はその先驅をオスワルト シュペングラールに見出すのである。爾來バルト、ブルンナーの基督教神學者、文化哲學者シユヴァイツァ、文明批評家ベルジャエフ、マリタン等が夫々の角度から西歐文明の危機を叫び、その救濟への道の發見に腐心して來た。

彼等の所論は冷靜なるロゴスに始り熱烈なるパトスに終つてゐる。

トインビーも亦西歐文明の危機を叫ぶ世紀の一人である。彼の所謂西歐文明の危機とは何であるか。

これに對しては彼は凡ての歴史家がする様に、形而上學究明を避け直ちに歴史的現實を以て應えてゐる。西歐文明の危機——これは實質的には戦争と階級である。彼は第一次世界戦争後に於ける戦争の物心両面に及ぼした戦禍の目撃者である。彼は戦争を以て一切の文明の破壊者とする。彼の戦争否定は文字通り絶対非戰論者である。階級に就て彼は支配者被支配者資本家労働者等と具體的に明示していない。彼は共產主義の否定者である。彼は併しソヴェエツトの西歐侵略に對しても亦之を否定する。西歐の危機は外敵の侵略ではなく反て西歐内部に秘む社會構造の矛盾である。斯る危機を克服する具體策として彼の提唱するものは世界政府の即時確立と資本主義と共產主義との折衷的經濟機構の案出とである。以上の具體策は焦眉の急を迫りこれは西歐文明の基本形態の根本的革正に先ぜられねばならないと絶叫する。世紀の人トインビーは現實主義者でもある。人は西歐文明の危機と呼ぶ。これは併し嚴密な表現を求められる時、近代の二字がこれに附加されねばならない。西歐文明の危機之れは近代文明の危機の謂である。近代西歐文明がヨーロッパ文明の凡てではない。古代西歐文明と中世西歐文明が近代西歐文明に對立してゐる。古代文明と近代文明とを比較する時、前者は豊潤であり後者は稀薄である。豊潤とは精神價值を意味し稀薄とは物質價值を意味する。

中世西歐意識と近代西歐意識と對比する時、前者に世界市民意識後者に國家民族のそれである。彼の理想像は宗教的秩序の世俗的秩序の支配である。かゝる時代を西歐に求めればそれは近世ヨーロッパに於てなく中世ヨーロッパに於てある。

世は古代史家といふ、また中世史家といふ。斯の如き名稱はその史家の研究分野によつて規定されるであろうか。史家の名稱は研究分野は言はずもかな更に彼の理想像による。トインビーの理想的世界像はベルジャエフの新しき中世であろう。此の意味に於て彼は中世的史家と呼ばれるべきではなからうか。

西歐文明の危機意識——これはまたこの克服への實踐でなければならぬ。彼は西歐文明を如何にして永遠に救おうとするであろうか。

三 歴史の反覆性

文明は救はれるか——斯る問題の究明は危機神學若くは宗教哲學の領域に屬するであろう。文明が救はれるべく人は何をなさねばならないか

——これは宗教の世界、豫言の分野に委ねられねばならない。文明は如何にして救われたか。——これは正しく歴史によつて答えらるべき間である。斯る問が歴史によつて答えられた時、歴史は繰返すかの問が問はれなければならない。歴史の反覆性が肯定される時、第一と第二の間は自ら解決の緒口を提供するであろう。筆者は今順序を變更し歴史は繰返すかのトインビーの問の検討を暫く試みて見たい。

歴史は繰返すか。——即ち歴史の反覆性は歴史の一回性と對峙して第十九世紀の西歐の史學界に於て激しい論議の對象となつた。こゝに筆者は歴史の反覆性と一回性との關係に就て一應説明を加えなければならぬ。歴史の反覆性と一回性との問題は古代と共に古い。これはギリシヤ史とイスラエル豫言との對立に於て其の端緒を示した。ギリシヤ人には世界は自然であつた。そうして其處に生起する一切の事象は彼のニーバル Niebuhr の主張する如く自然現象の回歸性であつた。反之イスラエル人には世界は歴史の舞臺であつた。イスラエルを中心とした諸國の興亡は彼等の神ヤーウエの怒の顯現でそれは終末的意味に於て觀ぜられた。彼等によれば歴史は絶えず終末の方向を辿つていた。

歴史の反覆性——これは歴史を貫く恒常の法則の發見を、歴史の一回性——これは歴史に顯はれた永遠の價値の解釋を意味する。前者は歴史哲學の立場であり後者は歴史學のそれである。兩者は相獨立しつゝ共存する事を許されないであろうか。トインビーは歴史の一回性を否定し反覆性を肯定する。併しこゝに注意しなければならないのは彼の否定する一回性とは上に述べられた意義に於けるそれではない。それはヘーゲル以來ヨーロッパ人の先入觀となつたヨーロッパ文明に於ける絶對精神の最終具顯とその一回性に對する抗議であつた。此の様なヨーロッパ世界一元論は既にその名を擧げたシュペンゲラーによつてその正體が露呈された。

シュペンゲラーは西洋を没落の經驗した。彼の西洋没落の經驗は彼を文化一般への省察と導いた。これは彼をして凡ての文化の方向は同一經路を辿る事を明にした。即ち誕生、生長、老衰、死、そうして彼によれば世界歴史は春夏秋冬の段階を劃し夫々文化形態を演じた。因にシュペラニグラーの省察への對象となつた文化は印度、古代、アラビヤ、西歐の四つ。ヘーゲルの史觀は一元的向上を示すとすればシュペンゲラーのそれは多元的向下を示すのではなからうか。前者には樂觀的後者は悲觀的である事は何人も否み得ないであろう。シュペンゲラーはトインビーによれば決定論者である。トインビーはこれに對し自由意志論者である。かゝる事から彼はシュペンゲラーの決定論を克服し歴史の一回性を否定しその反覆性を主張する。

四 文明と宗教

文明は如何にして救はれたか。此の問題が問はれる前提として先づ文明が如何にして成立したか、尋ねられねばならない。トインビーはこれに對し二つの命題を提供する。即ち挑戦と應答・文明の會合。此の二つの命題は併しトインビーを待つて始めて明にされた眞理であろうか。第一挑戦と應答即ち環境と人種の出會。——これは既にカント以後の文化哲學に於て論議されたところではなかつたか、他方文明の出會も亦世界史學の成立とともに自明の理として承認された事柄ではなかつたか。挑戦と應答そうして文明の遭遇、文明の成立は以上の二つの命題で充分に説明されていないであろうか。それはトインビーの場合に於ても、こゝに人のトインビーに就て着目すべきものは文明の成立に就てはなくむしろ文明と宗教との關係である。

トインビーによれば文明を作るものは個人である。少數の個人である。一般大衆ではない。また民族でもない。ではかゝる少數の個人とは如何なるものか。政治的天才であろうか、藝術的巨匠であろうか。それは彼によれば宗教的巨像である。宗教は斯る宗教的巨像の創造である。個人の創造性が拒否され文明が普遍化される時、文明が凋落する。

かく凋落した文明が再生した。それは宗教によつて。宗教はかゝる場合蛹のような役割を演じた。人はかゝるものとしてギリシヤローマ文明の再生にローマカソリック教會を擧げる事が出来る。宗教は文明の昇華でありまた根帯である。否文明そのものである。

ヤコブ・ブルツクハルトは歴史を構成する要因として政治經濟文化宗教の四つを規定した。フステル・ド・リーランジュは宗教を古代國家の法制との關連に於て捉えた。マックス・ウェーバーはカルヴイン主義に近代資本主義精神の端緒を求めたのは人の能く知る所である。

ブルツクハルトと言ひ、クーランジュと言ひ、ウェーバーと言ひ、いづれも宗教を政治經濟文化と對立させて言はゞこれ等を同一系列に入れる。トインビーは併し宗教を政治經濟文化に優位させ且つ之等を包越させる。

彼は普遍國家 (Universal state) なる言葉を用ひ、また普遍教會 (Universal church) の語を併用する。具體的に言えばギリシヤローマ世界は普遍國家ローマカソリック教會は普遍教會である。これは他の文明に就ても同じである。普遍國家に顯在し、普遍教會は潜在する。西田哲學の語法に従う事が許されるならば、普遍國家は有的普遍、普遍教會は無的普遍と言つて誤がないであろう。普遍國家は有的なるが故に地域に制

限される。普遍國教會は無的なるが故に地域を超越する。例えばイエスをキリストとする西歐文明もその起元は西アジアである。

五 高等宗教とキリスト教

文明は如何にして救はれたか——トインビーは此の間を歴史に求めた。一方彼は歴史の反覆性を確信する。現代の西歐文明は如何にして救はれるか。此の未來に關する解答は過去に於ける場合の反覆でなければならぬであろう。現代西歐文明の危機は併しながら單に西歐世界内の問題たるにとどまらない。それは世界文明の危機と密接に關連する。彼の「試練に立つ文明」といふ表題の下に世人に訴えようとするものは正しく世界文明の危機を意味するものである。

人は現代世界をイデオロギー的に資本主義國家陣と共產主義社會陣に二分する。トインビーは併し既に述べた如く社會、普遍國家の對立によつて世界に於ける文明の對立を説く。そうして現代は西歐を中心としたかゝる文明のまんじ巴の遭遇戰である。

既に明にされたようトインビーの所謂文明そのものは宗教の謂であつた。こゝから文明と文明との遭遇は宗教と宗教との遭遇である。こゝに筆者はトインビーの宗教觀に言及しなければならなくなつた。トインビーは宗教學者ではない。彼は現存のキリスト教回教印度教等に對し比較宗教學者のするように系列段階を附與しようと敢てしない。

彼は併しローマカトリック教會の國家權力からの獨立、ギリシヤ正教會の國家權力への隸屬を説く。他方彼は印度教の武力への妥協を拒む事、回教の武力との提携する事を擧げる。斯る宗教の具體的在り方を明示する事は此等の宗教に對する價值系列の附與ではなからうか。ヘーゲルは彼の歴史哲學に於て世界に於ける神の計畫を強調する。神の世界計畫によれば歴史事象は段階的發展をなすものであり、これは宗教に就ても妥當すべく凡その歴史宗教はキリスト教に於て最高頂に達したと言つた。

彼はヘーゲルと結局に於てその見解に同じにする。併し彼はこれについて敢つて理論工作を企てない。彼はこれをなすべく唯「キリスト教と高等宗教」と呼稱しているに過ぎない。彼によれば一切の宗教はキリスト教への雛形でありヘブル書記者の表現を借れるならば來らんとする善き事の影である。

六 トインビーと基督教

普遍國家としてのギリシャローマ世界の遺産は普遍教會としてのローマカトリック教會に繼承された。ローマカトリック教會はその牢固たる傳統とそうして強靱なる組織の故に地上に會て存在した最大な普遍教會である。それは今後も崩壊してゆく西歐文明再生のホープたるを失はないうであらう。

中世史家としてのトインビーは併しカトリック主義者ではない。茲に筆者はトインビーの基督教信仰に觸れなければならない。彼の基督教信仰は神の救濟である。即ち神と人との關係の恢復である。

舊約時代に於て神と人との關係が斷絶した。神と人との斷絶——これが所謂原罪である。

原罪は個人に於ては靈性の腐敗であり世界に於ては社會の混亂である。神の救濟即ち原罪からの救い——神と人の交の恢復は先づ神と個人との直接交渉に於て成立する。カトリック教會に於ては神の救の神と個人との直接交渉が拒絶され、人は神に至るべくカトリック教會を経由しなければならない。

トインビーによればカトリック教會の存在理由は唯その教職階制と彌撒、言い替れば組織と儀式に存し、その救濟の故にではない。カトリック教會は既に述べた高等宗教と同じ系列に立つものと言つて過言ではないであらう。

神の救濟——嚴密に言えば神のキリストによる人類の救はカトリック教會、プロテスタント教會ギリシャ正教會のいづれにもその信條たる點に於ては變らない。併し同一教義から何故、かく教會が分派するに至つたか。多くは語られなければならない。此處では唯その一つに觸れるを以て満足しなければならない。それは原罪に關する相互の見解の相違に基く、との一事である。

筆者はこゝにカトリック的原罪觀とプロテスタント的原罪觀に就て簡単に述べよう。

カトリックによれば原罪とは神と人との疎隔である。プロテスタントによれば原罪とは神と人との隔絶である。

カトリック的原罪觀によれば神と人との疎隔には人の側から神への接近の餘地が残されている。こゝにカトリックの善行主義が強調される根據がある。

反之プロテスタント的原罪觀即ち神と人との隔絶は神の人の側への接近の道が全く杜絶される。こゝにプロテスタントは信仰絶對主義となる。ニイグレンの言葉によれば前者はエロスの向上の立場であり後者はアガペー的向下のそれである。

他面前者に於ては神の救済は攝理の形を取り後者に於ては神の贖罪の形となる。カトリック的原罪觀に對する救済はまた神の試練となりプロテスタント的原罪觀に對する救は審判となる。前者にあつては神の計畫は歴史となり後者に於ては終末的となる。

トインビーはカトリック教會の否定たる點に於てそうして神と人との直接關係を主張する點に於て絶對にカトリック的ではない。併し原罪に關する限り彼はプロテスタントではなくカトリック的である。尙ほ彼は世界歴史を神の人間の訓練の場と觀じ、歴史の進行課程は試作と錯誤の反覆に於て見、また歴史事象の回歸を信ずる事は正しくカトリック的救済史觀である。

人も知る如くアウグステイヌスはその名著「神の國」に於て「神の國」と「地の國」との對立を説いた。「神の國」と「地の國」は此の地上世界に併立し前者は神への愛 (Amor Dei) 後者は自己愛 (Amor Sui) の二つの相違つた原理に基いて相剋し遂に「神の國」が「地の國」に勝利を占めると結論した。

以來基督教を通じ神の國の性格が論議され特にそれは歴史哲學の課題とされた。トインビーは神の國に就てどんな見解を抱いているか。

彼はヨハネ傳の神のイエスに於ける受肉説の信奉者である。神の受肉——これは永遠の時間への介入である。キリストの受肉は併しそれだけ神の國の成就ではない。それは十字架復活再臨の順序に於て完成される。彼は歴史は永遠の時間への介入とする。彼は此事から神の國の歴史に於る部分的完成を主張する。

結 語

一國の歴史たるは一國の歴史たるに留らない。それは世界の歴史である。世界の歴史はこゝに世界の歴史たるにとゞまらうか。トインビーの歴史的視野は斯く無限に擴大されて行く。歴史は結局永遠と時代との問題また神と人との關係まで遡らなければならぬであらう。トインビーの歴史觀はかゝる意味に於て劃期と言えるではなからうか。史學の方法、史實の客觀性の如何等に就ては今後に於て検討さるべき幾多の問題が残されるであらう。併しトインビー史觀はトインビー史學に優位する事は吾人の信じて疑はない。文明の基底に宗教をおくトインビーは文化の

下部構層に生産様式をおくマルクスの唯物必觀と文字通り對蹠的であると言つて差支ないであろう。

近代世界文明の危機——この要因は一にして足りない。民族主義、民族至上主義の自己矛盾も蓋しその一つではなからうか。個人は如何にして人類に到達し得るか。個人より人類への中階段階に存するものは民族である。人は民族主義を克服しようとして試みた。そうして悲しくも失敗した。

マルクスは民族主義を克服しようとして民族なる單位に階級を代えた。これが果して所期の目的を達したであろうか。史家として新しい世界史學の體系を試みるトインビー、彼はまた世紀人として新しい世界秩序を夢みる人である。民族主義より彼は如何にして實踐と理論との面から人類主義への道を拓くであろうか。筆者はトインビーに之を切に期待して止まないものである。

終に筆者はトインビーの *Civilization on trial* を繙くに當り譯者の原譯に負う所が多かつた。教會史家ネアンデルの言葉として傳えられるもの、神學の中心はハートなり。トインビー史學の中心も亦ハートである。譯者は能く著書の内容を正確に把握する反面——著者のハートに暖くも觸れた。筆者は譯者に感謝と敬意とを捧げつゝ筆を擱く。(一九五三、一、三二)

参 考 文 献

- Toynbee: *Study of History. Civilization on trial.*
Augustine: *De Civitate Delcontra paganos.*
Berdyae: *The End of our Time. Das Neue Mittelalter.*
Spengler: *Der Untergang des Abendlandes.*
Niebur: *faith and History.*
Nygren: *Agapei und Eros.*
Thomasum Aquin: *Summa Theologica Deutsche-lateinische Ausgabe.*
其他。